女子大学生による子どもに向けた絵本の「語り」：養育者の絵本の語りにおける評価方略の検討に向けて

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻, 弘美, ツジ, ヒロミ, TSUJI, Hiromi メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3833

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

女子大学生による子どもに向けた絵本の「語り」
―養育者の絵本の語りにおける評価方略の検討に向けて―

心理学部　発達教育心理学科　辻　弘美

要旨：養育者が絵本のナラティブで用いる言語は、子どもの社会認知的能力の発達に寄与するとされている。本研究はナラティブにあらわれる言語的な評価方略に注目し、その特徴に関する多様性を検討するための予備的調査を行うことを目的とする。本研究では、女子大学生を対象に異なる学問専攻領域グループ間で絵本の語りにみられるナラティブスタイルを比較検討した。幼児教育学専攻の学生は、心理学専攻の学生に比べて、擬音語・擬態語を相対的に頻繁に用いるのに対し、心的状態や因果関係をあらわす語の使用が少ないことが示された。養育者の子どもに向けた絵本のナラティブの個人差はいかに生まれてくるのかについて、これらの結果が示唆できることを議論する。

キーワード：ナラティブ、養育語、心的状態語、ナラティブ方略、日本語

問題と目的

親子のコミュニケーションにおいて、過去の出来事について回想することや、絵本のおはなしを語るといった活動はナラティブの一つとしてとらえられている（Preece 1987）。このナラティブにおいて、親は足場作り的役割をもつとして、そのナラティブのスタイルが、子どもの言語・認知能力との関係から検討されてきた（Fivush & Fromhoff 1988; Reese & Cleveland 2006; Reese Haden & Fivush 1993; Welch-Ross 1997）。近年、子どもに聞かせる絵本のナラティブにおいても、親が登場人物の心的状態に言及しその因果についての説明をしようとする傾向は、子の心の理論などの社会認知的能力の発達に寄与するという報告がされている（Adrian Clemente Villanuea & Rieffe 2005; Adrián Clemente & Villanueva 2007; Slaughter Peterson & Mackintosh 2007）。

またこれらのナラティブのスタイルは、親が何を目的として絵本の読み聞かせをしているのかとも関連している（Harkins 1993）。Harkins は、子どもと絵本を通してゆっくりと寛ぐことや子どもの人間性を高めることを目的としている親は、出来事にかかわる登場人物の内的状態について語る傾向がみられたのに対し、絵本の読み聞かせを介して就学前の準備やリテラシー発達を意識した親は、それぞれの出来事について語るよりも、子どもにお話の要旨の理解を促したり、お話に対する自分の考えを語ったりする傾向があるとしている。

このようなナラティブのスタイルの違いはいかにして生まれるのであろうか。一つには、母親の教育歴要因が関連することは多くの研究で認められている（Harkins 1993; Reese & Newcombe 2007）。母親の教育暦などのデモグラフィック要因にその説明をもとめるのみにとどまらず、個人の心理的特性や他の環境要因として何がナラティブのスタイルを生み出すのかについて検討していくことは、親業の発達やその支援をしていく上でも重要な視点を与えることになるといえる。広い視座からとらえると、ナラティブのスタイルを生み出す要因は大きく 2 つあると考えられる。一つは、子育ての経験である。親の働きかけに対する子どもの反応自体が親へのフィードバックとなり、親自身のナラティブのスタイルが再形成されていくという可能性である。もう一つは、ナラティブのスタイルは、個人の認知スタイルや学習スタイルなどの概念で表される心理的特性から派生しているという可能性である。認知スタイルとしては、例えば「共感」と「システム化」の 2 次元から個人の情報処理の仕方や対人関係のとり方を特徴付けようとする試みとともに、これらが青年期以降のキャリア選択と関連づいているとする報告もある（Billington Baron-Cohen & Wheelwright 2007; Focquaert Steven Wolford Colden & Gazzaniga 2007）。他には学習スタイルと専攻学問領域の関連性についても古くから研究がされてきた（Entwistle & Ramsden 1982; Kolb 1981; Vermunt 2005）。学習スタイルは認知スタイルの概念が示すような固定的なもの

ではなく、経験との相互作用によって形成されていく柔軟性をもつと考えられている。このように「スタイル」を固定的もしくは柔軟的なものととらえる議論については様々な見解があるものの、スタイルの多様性の存在については、先行研究から十分な根拠がみとめられるであろうと考えられる。よって本研究では、学問専攻領域によってナラティブなどの具体的な活動においてもスタイルの違いが認められるのではないかと仮定し、具体的にそれらがどのようなナラティブ方略の特徴において顕著であるのかについて検討する。

これらの検討結果から得られた知見は、子どもへの絵本の語りにおける個性を検討する足がかりを得るためのステップとなることが期待される。また女子大学生を対象にすることは、母親になる最も近い発達段階の個人を対象に、教育歴が自然に統制された条件下でナラティブの比較検証ができるという利点がある。さらにこれらの知見は、養育者のナラティブのスタイルの多様性を説明する要因を検討していく上でも有用であると考えられる。

大学生の保育者適正を心理特性の視点から検討した研究（藤村 2012）では、保育者としての資質の一つに「共感性」があげられている。保育者養成課程の女子大学生においては、保育者特性としての共感性は、他の学問領域専攻の女子大学生に比べて有意に高いことが報告されている。このような研究結果を踏まえても、女子大学生の学問専攻領域においてナラティブのスタイルに違いがみられる可能性は十分に考えられる。

本研究では、ナラティブ研究（Strömqvist & Verhoeven 2004）で国際的に広く用いられている文字のない絵を通して産出されるナラティブをデータとして分析することとする。ナラティブ研究では、ナラティブは大きく 2 つの要素－「語り」と「評価」からなるとされている（Labov & Waletzky 1967）。Bamberg & Damrad-Frye（1991）は、ナラティブの評価とは出来事の描写を超え、描写された出来事の結果として生起する心的状態に及んだ情報を含むとしている。

ナラティブの評価方略の発達については、幼児期および児童期の子どもから成人を対象に比較言語学の視点も踏まえながら数多くの検討がされてきた（Küntay & Nakamura 2004）。しかしながら、これらの研究は、青年期から成人期を対象とした個人差の検討にまで進展していないのが現状である。よって、これまでの研究で検討されてきたナラティブの評価方略の視点から、ナラティブの個人差についての検討をすることは、これまでのナラティブ発達の研究をさらに進展させるという意味でも、価値があると考えられる。

従来のナラティブ研究では、特に絵本の語りとなると、口述によるものが中心となっている。しかし本研究で取り扱うナラティブとしては、子どもに向けて行う絵本の語りを、記述されたナラティブとして産出するように計画した。Tannen（1982）は、口述ナラティブと記述ナラティブの大きな特徴を、前者が「かかわり」重視であるのに対し、後者は「情報の統合」を重視するとしている。口述ナラティブは、聞き手や文脈への依存度が高く、聞き手とのかかわりの中で生起するパラ言語や非言語的なモードとの関係と切り離すことは難しい。一方で記述ナラティブでは、情報がさまざまな文法構造や言語の特徴を活かしてまとまりを持たせ表現することになる。すなわち、口述によるナラティブの分析では、言語情報に加えて抑揚などのパラ言語をふくめた総合的な分析が必要とされるのに対し、記述ナラティブでは、それ自体が一つの統合された形として分析対象となることである。また Labov & Waletzky（1967）はナラティブに用いる評価方略について、出来事に対する評価を外面化する場合には言語化する方略を用いるが、語り手に内在した評価は、パラ言語を介して黙示的に表現されるとしている。

これらより、記述式ナラティブ課題では、口述ナラティブの場合にみられるパラ言語のアウトプットは、明示する必要性があるのなら記述ナラティブ産出の過程で言語化されるであろうと仮定できる。本研究の関心は、養育者の心的状態語や因果関係の説明に関した、子どもへの明示的な語りを通してみられるナラティブスタイルの探索的な検討である。よって、ここでは記述された言語としてのナラティブを対象とした分析を通して、学問専攻領域グループにおけるナラティブ方略の特徴を比較することとした。

方法

対象者　84 名の女子大学生（心理学専攻：48 名、幼児教育学専攻：38 名）を対象に調査を実施した。年齢はそれぞれ M＝20.4 歳　SD＝.67　M＝20.1 歳　SD＝.30 であった。

課題と手続き　字のない絵本、『Frog where are you?』（Mayer, 1969）を題材として用いた。各専攻グループの学生に対し、「子どもに読み聞かせることを意識して、お話を作ってください」と伝え、絵本のページに沿ってナラティブを用紙に記述するよう教示した。課題の所要時間は 60 分程度であった。登場人物の発話を表わす場合には、鍵括弧を用いるように指示した。

データ処理

記述されたナラティブを節に分け、後述のコーディング・カテゴリーに基づきコーディングを行った。

コーディング・カテゴリー

先行研究（Küntay & Nakamura 2004）が用いたナラティブの評価方略のカテゴリーに一部の内容追加をし、全 8 種類のコーディングを用いた。これらのカテゴリーは、「心的状態」、「ヘッジ（不確定な表現）」、「否定表現」、「登場人物の発話」、「因果関係」、「強調表現」、「擬音語・擬態語」であった「擬音語・擬態語」のカテゴリーには、子どもへの語りということから、感動、応答、呼び掛けを直接的に表す感嘆表現を含めた。（定義および具体例については、Appendix を参照）。追加カテゴリーとして、身体的状態についてのコーディングも行った。この追加は、養育者の心的状態語を検討した研究（Taumoepeau & Ruffman 2006 2008）において、心的状態語ではないが感情に関連する身体的状態として、“泣く”、“笑う”、“疲れる”、“眠い”などの表現がコード化されていることを考慮してのことであった。

コーディング

記述ナラティブのコーディングは 2 名のコーダーが行った。全体の約 50%にあたるナラティブは、2 名が独立にコーディングし、一致度 Cohen's Kappa を産出した：$\kappa = .91$。不一致のコーディング項目については、協議の上最終コーディングを決定した。

結果と考察

ナラティブにみられた評価方略カテゴリーごとに頻度を算出した。ナラティブの長さと評価方略のコーディング合計頻度の間には、高い相関関係が認められた（$r = .79$ $p < .0001$）。本研究は、評価方略のスタイルの違いに注目していることから、語り手が用いた評価方略の合計頻度に対する、各カテゴリーの使用頻度割合を算出し、これらをもとに以後の分析を実施した。カテゴリーごとの使用頻度割合について、学生の専攻グループごとの記述統計を Table 1 に示す。使用頻度割合が最も高いのは、「登場人物の発話」方略であった。次いで「強調表現」や「心的状態語」の使用割合が高かった。各カテゴリーの使用頻度割合の分布を検討したところ、正規性が認められないものがあった。よって以後の分析はノンパラメトリック検定（両側検定）を用いた。

Table 1　学科専攻別のナラティブ評価方略使用の割合

評価方略	幼児教育学 n = 38				心理学 n = 48			
	M	(SD)	Mdn	(IQR)	M	(SD)	Mdn	(IQR)
心的状態語	.133	(.065)	.134	(.109)	.171	(.062)	.175	(.081)
身体的状態語	.030	(.024)	.027	(.040)	.046	(.026)	.041	(.030)
ヘッジ(不確定表現)	.052	(.076)	.026	(.042)	.039	(.032)	.036	(.049)
否定表現	.094	(.043)	.093	(.057)	.106	(.043)	.102	(.068)
登場人物の発話	.265	(.133)	.261	(.183)	.206	(.130)	.246	(.226)
因果関係	.070	(.054)	.067	(.069)	.113	(.057)	.109	(.090)
強調表現	.171	(.095)	.148	(.147)	.220	(.123)	.204	(.154)
擬音語・擬態語	.187	(.096)	.165	(.167)	.099	(.079)	.084	(.105)
評価方略使用頻度	53.9	(18.2)	47.0	(14.0)	61.4	(24.0)	48.5	(25.0)
語りの長さ(節の総数)	48.4	(12.9)	54.0	(33.0)	51.6	(15.7)	53.0	(48.0)

ナラティブ方略の専攻グループ間比較

専攻グループ間における、ナラティブの長さおよび評価方略使用総数を比較したところ、有意差は認められなかった（節の総数：Mann-Whitney 検定、$N = 86$ $z = .82$ $p = .41$　評価方略使用総数：$N = 86$ $z = 1.13$ $p = .26$）。すなわち、基本的な語りの量や、評価方略の使用頻度においては、専攻グループ間に違いがみられないと考えられる。これらの結果をもとに、それぞれの方略カテゴリーの使用頻度割合においてグループ間比較の分析を実施した。

Mann-Whitney 検定を用いグループ間の使用頻度割合を比較した。心的状態語（N = 86 z = 2.83 p = .005）、身体的状態語の使用（N = 86 z = 2.57 p = .01）、因果関係（N = 86 z = 3.67 p < .001）においては、幼児教育学専攻グループに比べて、心理学専攻グループによる使用頻度割合が有意に高かった。一方で、擬音語・擬態語の使用割合（N = 86 z = 4.35 p < .001）については、前者が後者に比べて有意に使用頻度割合が高かった。養育者と女子大学生による、同様の Frog Story のナラティブを比較した先行研究（Toi & Tsuji 2011）においても、擬音語・擬態語が女子大学生よりも養育者の語りで、有意に高い割合で使用されていた。子どもに読み聞かせをすることを意識して語りを行うという課題を設定していたことより、養育経験や保育に関心のあるグループでは、より擬音語・擬態語の評価方略を用いた可能性が考えられる。一方で、因果関係を表す評価方略や心的状態や身体的状態に及んだ評価方略は、幼児教育学専攻グループに比べ、心理学専攻グループでより多く用いられていた。またどちらのグループにおいても、擬音語・擬態語の使用と因果関係の使用方略の間に有意な負の相関関係が認められたこと（幼児教育学および心理学それぞれ、r_s = -.69 p < .001 r_s = -.67 p < .001）、同様に心的状態語の使用との間に有意な負の相関関係が認められたこと（幼児教育学および心理学それぞれ、r_s = -.43 p < .01 r_s = -.58 p < .001）より、相対的に擬音語・擬態語を頻用するナラティブのスタイルと因果関係や心的状態をより多く用いるナラティブのスタイルがあることを示唆している。学問領域グループ間比較としては、幼児教育学専攻グループに、より擬音語・擬態語方略を用いる語り手が、心理学専攻グループに、より心的状態や出来事の因果関係への言及による評価を行う語り手がみられたとも解釈できよう。

ナラティブ方略スタイルと養育志向

本研究では、記述ナラティブで用いられた評価方略が、子どもに関わることを目的とした学問専攻領域選択を明確に意識している学生とその限りでない学生において異なることが示された。

絵本の語り手の年齢や教育歴とは独立に、大学生の段階でこのようなナラティブスタイルの差異がみられることは、子どもにむけた養育者のナラティブにおいて、なぜ心的状態語や出来事の説明に関する評価方略の使用に個人差がみられるのかを考えていく上で重要な示唆を与えるといえる。

幼児教育学専攻グループに特徴的な評価方略としては、「擬音・擬態語」の使用であった。この傾向は、口述ナラティブで産出された評価方略を実際の養育者と女子大学生において比較した研究結果（Toi & Tsuji 2011）と同様の傾向であるといえる。これは、実際の子育て、もしくは養育や保育について考えることが、具体的な子どもの行動や特徴をイメージしやすくし、これらが養育語（Child Directed Speech）といわれる特徴の一つである単純で短く直感的な言語表現の使用、すなわち日本語の場合には擬音や擬態表現の頻用につながった可能性はあるといえる。一方で養育語に関する研究からは、大人は、一般的に養育経験にかかわらず幼い子どもに対して養育語を使用することが報告されていることから（Snow 1972）、今回の結果は、一概に保育に関する知識の有無だけが要因であるとは言えないであろう。むしろ幼児教育保育に関する専門知識やスキルの習得を通して幼児教育学専攻グループの学生には子ども像が明瞭にあるのではないかと仮定できる。今回の研究では、子どものイメージについての専攻グループ間の違いを検討していないため、これらは推測の域を超えないが、実際の読み聞かせ場面を仮定しながらナラティブを作成する際に、どの程度具体的な子どもについての表象が思いていたかが、このグループに特徴的なナラティブ方略を用いる傾向に繋がったとも考えられよう。

しかしながら、心理学専攻グループの学生は、幼児教育学専攻グループの学生より、高い割合で出来事の「因果関係」を評価方略として用いていたことは注目すべきことである。すなわち、より具体的な子どものイメージを持つことが、「心的状態語」や「因果関係」の評価方略を用いようとする傾向に有利に働いているわけではない結果がみられたことは、さらに大きな意味を持っているであろう。心理学専攻の女子大学生のナラティブの様相が、幼児教育専攻以外の学生の代表値ととらえることができるとはいえないが、学問体系に特有の学びのアプローチの仕方が、所属する学生の認知スタイルを形成する、もしくは特定の認知スタイルを持った個人が自分に適した学問領域を選択する結果であるとも解釈できよう。

次に、養育者による登場人物の心的状態語や出来事の説明を用いたナラティブスタイルが、子どもの心の理解発達に寄与するとされている（Adrian et al. 2005; Adrián et al. 2007; Slaughter et al. 2007）ことから、どのような経験や個人特性をもつ養育者が、より登場人物の心的状態語や出来事の説明を用いたナラティブ

スタイルを用いるかについて考えてみる。今回の研究結果を、実際の養育者と女子大学生のナラティブのスタイル比較の結果（Toi & Tsuji 2011）とあわせてみると、実際の養育経験をもつことや、保育を具体的にイメージすることは、擬音・擬態語を用いた直感的な語りのスタイルをとりやすい傾向があると考えられる。しかしながら、これらの経験が必ずしも子どもの認知発達を促進するナラティブスタイルには繋がっているとはいえない可能性を示唆している。

これらの研究結果が親の発達に示唆することとしては、次の内容が考えられる。子どもに関する具体的知識があるものほど、子どもと具体的な出来事を共有するために、「擬音・擬態語」などにみられる直感的な表現による評価方略を用いる傾向があるのではないか。この直感的な表現は従来の養育語の役割の視点からすると、子どもの注意を喚起する機能などの重要な一面ではあるが、これらの機能にとどまらず、子どもの心の発達に寄与していくための役割として、出来事の説明や心的状態への言及を含めた絵本のナラティブのスタイルも意識していく必要があるのではないだろうか。

養育者の個人差には、単純な養育・保育に関する経験の有無に加え、個人の例えば認知スタイルもしくは、心理的な個人特性などの視点から検討を加えていくことが必要であると考えられる。

本研究では、子どもにむけた絵本のナラティブの個人差をとらえる第一段階として、学問専攻領域の異なる女子大学生ナラティブの比較を通して、それぞれの専門領域グループの相対的な特徴を見いだすことができた。今後の研究の方向性としては、年齢や教育歴要因に加え、認知スタイルとして、情動的および認知的な側面を踏まえた、多次元的な視点（e.g. Davis 1983）からとらえた共感性やシステム化する個人特性などを説明変数とし、読み聞かせスタイルの個人差についての検討が期待できる。

引用文献

Adrian J. E. Clemente R. A. Villanuea L. & Rieffe C. (2005). Parent–child picture-book reading mothers' mental state language and children's theory of mind. *Journal of Child Language 32*(03) 673-686. doi: doi:10.1017/S0305000905006963

Adrián J. E. Clemente R. A. & Villanueva L. (2007). Mothers' Use of Cognitive State Verbs in Picture-Book Reading and the Development of Children's Understanding of Mind: A Longitudinal Study. *Child Development 78*(4) 1052-1067. doi: 10.1111/j.1467-8624.2007.01052.x

Bamberg M. & Damrad-Frye R. (1991). On the ability to provide evaluative comments: further explorations of children's narrative competences. *Journal of Child Language 18* 689-710.

Billington J. Baron-Cohen S. & Wheelwright S. (2007). Cognitive style predicts entry into physical sciences and humanities: Questionnaire and performance tests of empathy and systemizing. *Learning and Individual Differences 17*(3) 260-268. doi: 10.1016/j.lindif.2007.02.004

Entwistle N. J. & Ramsden P. (1982). *Understanding Student Learning :* Croom Helm Ltd Provident House Burrell Row Beckenham Kent; Nichols Publishing Company P.O. Box 96 New York NY 10024.

Fivush R. & Fromhoff F. A. (1988). Style and structure in mother,Äêchild conversations about the past. *Discourse Processes 11*(3) 337-355. doi: 10.1080/01638538809544707

Focquaert F. Steven M. S. Wolford G. L. Colden A. & Gazzaniga M. S. (2007). Empathizing and systemizing cognitive traits in the sciences and humanities. *Personality and Individual Differences 43*(3) 619-625. doi: 10.1016/j.paid.2007.01.004

Harkins D. A. (1993). Parental goals and styles of storytelling. In J. Demick K. Bursik & R. DiBiase (Eds.) *Parental Development* (pp. 61-74): L. Erlbaum.

Kolb D. A. (1981). Learning styles and disciplinary differences. In A. Chickering (Ed.) *The modern American college*. (pp. 232-255). San Francisco CA: Jossey Bass.

Küntay A. C. & Nakamura K. (2004). Linguistic strategies serving evaluative functions: A comparison between Japanese and Turkish Narratives. In S. Strömqvist & L. Verhoeven (Eds.) *Relating events in narrative* (Vol. 2: Typological and contextual perspectives pp. 329-358). Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates.

Labov W. & Waletzky J. (1967). Narrative analysis: Oral versions of personal experience. In J. Helm (Ed.) *Essays on the verbal and visual arts* (pp. 12-44). Seattle WA: University of Washington Press.

Preece A. (1987). The range of narrative forms conversationally produced by young children. *Journal*

of Child Language 14(02) 353-373.
doi: doi:10.1017/S0305000900012976

Reese E. & Cleveland E. S. (2006). Mother-Child Reminiscing and Children's Understanding of Mind. *Merrill-Palmer Quarterly 52* 17-43.

Reese E. Haden C. A. & Fivush R. (1993). Mother-child conversations about the past: Relationships of style and memory over time. *Cognitive Development 8*(4) 403-430. doi: 10.1016/s0885-2014(05)80002-4

Reese E. & Newcombe R. (2007). Training Mothers in Elaborative Reminiscing Enhances Children's Autobiographical Memory and Narrative. *Child Development 78*(4) 1153-1170.
doi: 10.1111/j.1467-8624.2007.01058.x

Slaughter V. Peterson C. C. & Mackintosh E. (2007). Mind What Mother Says: Narrative Input and Theory of Mind in Typical Children and Those on the Autism Spectrum. *Child Development 78*(3) 839-858.
doi: 10.1111/j.1467-8624.2007.01036.x

Snow C. E. (1972). Mothers' speech to children learning language. *Child Development 43* 549-565.

Strömqvist S. & Verhoeven L. (2004). *Relating Events in Narrative: Typological and Contextual Perspectives* (Vol. 2). Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates.

Tannen D. (1982). Oral and Literate Strategies in Spoken and Written Narratives. *Language 58*(1) 1-21.

Taumoepeau M. & Ruffman T. (2006). Mother and infant talk about mental states relates to desire language and emotion understanding. *Child Development 77* 465-481.

Taumoepeau M. & Ruffman T. (2008). Stepping stone to others' minds: Maternal talk relates to child mental state language and emotion understanding at 15 24 and 33 months *Child Development 79* 284-302.

Toi Y. & Tsuji H. (2011). *Story telling to children: what differences are related to child-rearing experiences?* Paper presented at the Pacific Early Childhood Education Research Association12th Annual Conference Kobe Japan.

Vermunt J. (2005). Relations between student learning patterns and personal and contextual factors and academic performance. *Higher Education 49*(3) 205-234. doi: 10.1007/s10734-004-6664-2

Welch-Ross M. K. (1997). Mother-child participation in conversation about the past: relationships to preschoolers' theory of mind. *Developmental Psychology 33*(4) 618-629.
doi: citeulike-article-id : 490105

Appendix　ナラティブ評価方略カテゴリー

評価方略	定義および例
心的状態語	登場人物などの心的状態（認知、感情を含む）を表す語：うれしい、怖い、喜ぶ、驚く、心配する、考える、わかる、興味をもつ
身体的状態語	身体的状態を表す表現：泣く、笑う、眠い、痛い、お腹が空く
ヘッジ（不確定表現）	命題の信憑性が不確な場合に用いる表現：たぶん、～かな、もしかしたら、～ようだ
否定表現	否定表現：～できない、～ない
登場人物の発話	語り手が登場人物になりきって産出した発話
因果関係	出来事の（因果）関係についての説明：～したので、～だから、それで～
強調表現	登場人物の行為を強調するために用いた副詞句：もう一度、大変～、とても～
擬音語・擬態語（感嘆表現）	聞き手の注意を喚起するために用いた音象徴による直接的表現：物事の状態や鳴き声を表す、ピョン（と飛ぶ）、ゲロゲロ、ドキドキ（する）、ハラハラ（する）、と感動、応答、呼び掛けを表す感嘆詞：おや！あれっ！しーっ！

Differences in the Narrative Styles of Female University Students: Implications for Maternal Use of Linguistic Strategies for Storytelling to Children

Faculty of Psychology, Department of Developmental and Educational Psychology
Hiromi TSUJI

Abstract

Maternal narrative input plays a facilitative role in the development of socio-cognitive ability in children. The purpose of this study is to investigate variations in narrative styles with a specific reference to the linguistic strategies used. To this end the present study compared the narrative styles of female university students as a function of their major subject of study. Early Childhood Education students used relatively more sound symbolic words such as onomatopoeias and used less mental state references and less causal connectors to describe events in a story in comparison with Psychology students. The implications of these findings are discussed with reference to an investigation of the origins of maternal inputs in storytelling to children.

Keywords : narrative, child directed speech, mental state words, narrative style, Japanese